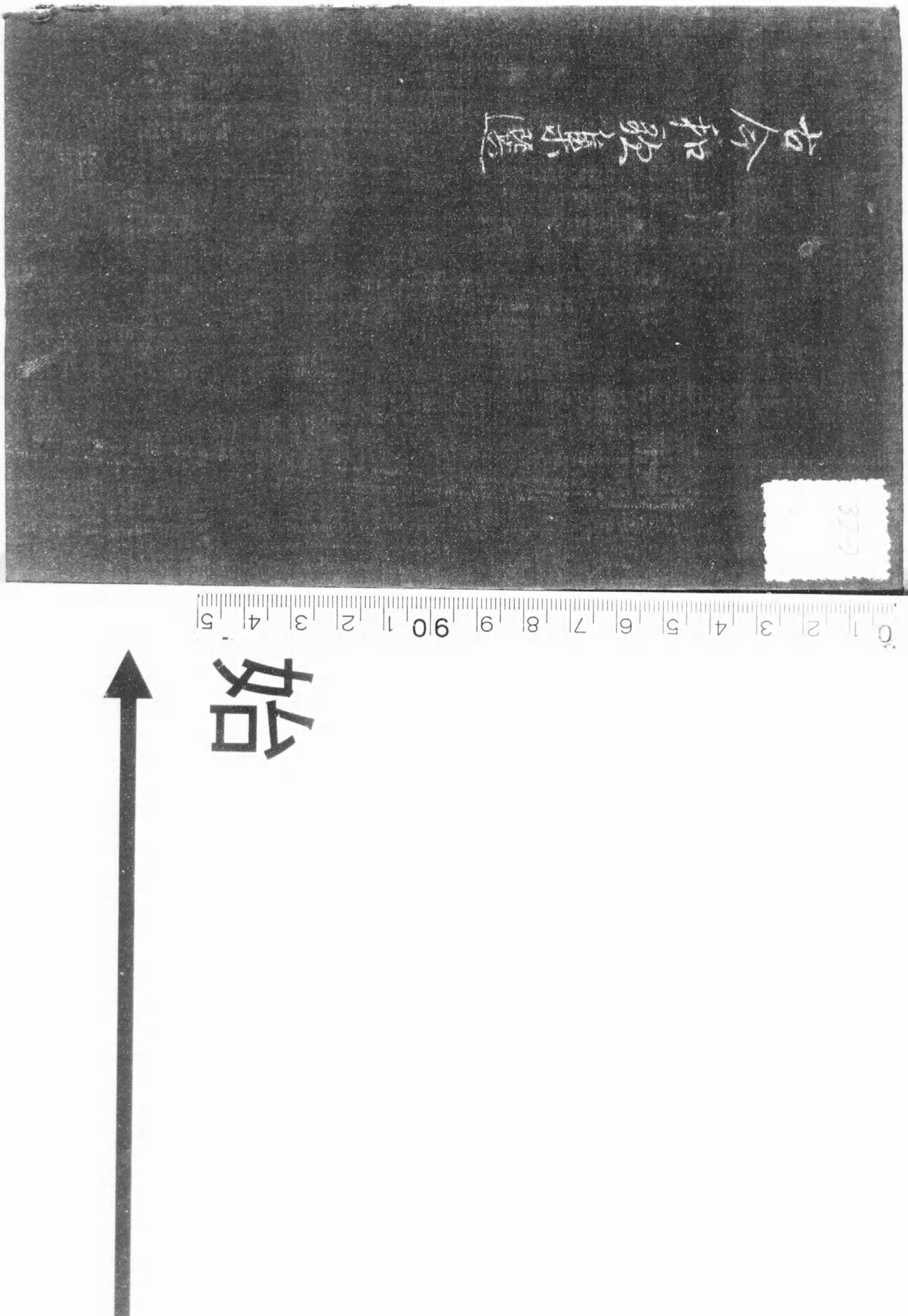

特218
868

古今和歌集選

例言

一、本書は主として高等學校大學豫科、專門學校、師範學校專攻科、高等女學校專攻科竝同高等科の教科書として編纂したものであるが、また一般に歌をたのしむ人々のために、古今集の歌に親しむことの出來るやうにと思つて編んだものである。

一、從つて古今集の特徴を最もよく表はしてゐると考へられる歌で、編者の佳しと思ふものだけを抄出することにした。さうして自分はことに古今集の精をある程度までは盡し得てゐると考へてゐる。だからまたこれによつて煩瑣な努力なしに古今集の佳きところを味解してもらへると信じてゐる。

一、頭註は煩瑣をさけてなるべく簡單にした。それから本文に異同あるものは、必要と思ふものだけを擧げておいた。正しく解釋することは必要

ではあるが、頭註のために歌のしらべが理解されないやうなことがないともかぎらないし、この點は教授者の手加減を待つ方がいゝと思つたからである。

一、古人がどういふ風に歌を見てゐたかといふことは、歌を味はふうへにことに忘れてならないと考へてゐるので俊成の古來風躰抄の言葉を全部引き、間々、宗祇の古今集聞書契冲の餘材抄の說を擧げることゝした。

昭和五年三月三日

編纂主任　大井　廣識

目次

古今和歌集序……一
春歌……三
春歌下……三
夏歌……四
秋歌……四
秋歌下……四
冬歌……五
賀歌……五
離別歌……六
旅歌……六
物名……七
戀歌……七

目次（終）

戀歌二……八〇
戀歌三……八四
戀歌四……八九
戀歌五……九六
哀傷歌……一〇五
雜歌上……一一三
雜歌下……一一八
雜體……一二六
旋頭歌……一三〇
誹諧歌……一三二
大歌所御歌……一三四
東歌……一三九
黑滅歌……一四〇

古今和歌集序

倭歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふ事を、見る物聞く物につけていひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの聲を聞けば、いきとしいけるもの、いづれか歌を詠まざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛きものの心をも慰むるは歌なり。この歌、天地の開け始まりける時よりいてきにけり。

しかあれども、世に傳はることは、久方の天にしては、下照姫にはじまり、あら金の土にしては、素盞嗚尊よりぞおこりけ

○人の心を――ひとつ心をともあり。

○下照姫――天照大神の御時の天稚彦の妻。

○大國主の神の女。

○下照姫にはじまり――御兄味耜高彦根命、高彦根命のかたちの、岡谷にうつりて赫くを見て詠めるなり。小長歌なり。

○素盞嗚尊――天照大

神の御弟。

○素盞嗚尊よりぞ――出雲にて詠みたつの神詠給へる八雲へり。この詠は下照姫のよりは古けれど、天地の順序のまゝに前後せしめたり。

○難波津の歌――「難波津にさくやこの花冬ごもりいまを春べとさくやこの花」といふ歌。

○みかどの云々――この博士王仁の作とぞ。

○この句の不完全にて意不明。

○浅香山の言の葉――浅香山の影さへみゆる山の井の浅くは人を思はなくにといふ歌。

○萬葉集巻十六――王城の奥の國に守護の葛城の疎陸奥の國に遇ふ歌。

○怒れる時に、女なる時に、女鳥をば捧げて、戯れてこの歌を詠めり。

○歌のさま六つ――わが國にて歌に六種の體をわかつ事なかりしかば、作者が、これを詩の風賦比興雅頌の六義をもとゝしてわざとこれを言へるなり。

○そへ歌――添歌。

○なずらへ歌――擬歌。

○たとへ歌――喩歌。

○たゞこと歌――直言歌。

○いはひ歌――祝歌。

○さゞれ石に――わが君は千代にましませの歌。

○筑波山に――筑波山このもかのもにの歌

る。

ちはやぶる神代には歌のもじも定まらず、すなほにして、こ
との心わき難かりけらし。人の世となりて、素盞嗚命より
ぞ、みそもじ餘り一文字はよみける。
かくてぞ、花をめで、鳥を美み、霞を憐び、露を悲ぶ心ことば多
く、さまざまになりにける。遠き處も、出立つ足もとよりは
じまりて年月をわたり、高き山も、麓の塵ひぢよりなりて、天
雲たなびくまで生ひのぼれるが如くに、この歌も、かくの如
くなるべし。
難波津の歌は、みかどのおほんはじめなり。浅香山の言の
葉は、采女の戯より詠みて、このふた歌は、歌の父母のやうに
てぞ、手習ふ人のはじめにもしける。
そもそも、歌のさまむつなり。唐の歌にもかくぞあるべき。

そのむくさの一つにはそへ歌、二つにはかぞへ歌、三つには
なずらへ歌、四つにはたとへ歌、五つにはただごと歌、六つに
はいはひ歌なり。
今の世の中色につき、人の心花になりにけるより、あだなる
歌、はかなき言の葉出でくれば、色ごのみの家に埋木の、人し
れぬ事となりて、まめなる所には、花薄、ほに出だすべき事に
もあらずなりにけり。そのはじめを思へば、かかるべくな
むあらぬ。古への代々のみかど、春の花のあした、秋の月の
夜毎に、さぶらふ人々を召して、事につけつつ、歌を獻らしめ
給ふ。あるは、花を翫ぶとて、たよりなき所にまどひ、あるは、
月をおもふとて、しるべなき闇にたどれる心々を見給ひて、
さかし愚なりとしろしめしけむ。しかあるのみならず、さ
ざれ石に喩へ、筑波山にかけて君をねがひ、よろこび身にす

○富士のけぶりに――人しれぬ思を常にの歌など。

○松蟲の音に――君しのぶ草にやつるゝの歌。

○高砂住の江の――誰をかもしる人にせむの歌及びわれ見てもなどく久しくなりぬの歌など。

○男山の――今こそあれ我も昔は男の歌。

○女郎花の一時を――秋の野になまめきたてる歌。

○鏡の影は云々――うば玉のわが黒髪やの歌など。

○草の露水の泡を云々――露をなどあだなる物と、及びうきながらけぬる泡ともの歌。

○けふは――正義による。

○松山の波を――君をおきてあだし心をの歌。

○野中の水を――いにしへの野中の清水の歌。

○秋萩の下葉を――秋萩の下葉いろづくの歌。

○鳴のはねがき――鳴のはねがき――鳴の鳴のはねがきの歌。

○呉竹の憂きふしを――世にふれば言の葉しげきの歌。

○吉野川を――流れては妹背の山の歌。

○ならの御時――奈良時代人麿は少し早く飛鳥藤原宮の頃の人なり。

○萬葉集――廿卷。奈良時代の末年の撰。

ぎたのしみ心に餘り、富士の烟によそへて人を戀ひ、松蟲の音に友をしのび、高砂住の江の松も、あひおひのやうに覺え、男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞ慰めける。　また、春のあしたに花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは、年毎に鏡の影に見ゆる雪と波とを歎き、草の露、水の泡を見て、わが身を驚き、あるは、きのふは榮えおごりて、けふは、時をうしなひ世にわび、親しかりしも疎くなり、あるは、松山の波をかけ、野中の水を汲み、秋萩の下葉をながめ、曉の鳴の羽搔を數へ、あるは、呉竹の憂きふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨み來つるに、今は、富士の山の烟も立たずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。

古へより、かく傳はるうちにも、　ならの御時よりぞ弘まりにける。　かの御時に柿本人麿呂なむ、歌のひじりなりける。又山部赤人といふ人あり、歌にあやしく妙なりけり。　人麿呂は、赤人が上に立たむ事かたく、赤人は、人麿呂が下に立たむ事難くなむありける。　この人々をおきて、又、優れたる人も、呉竹の代々に聞え、片絲のよりよりに絶えずぞありける、これよりさきの歌を集めてなむ、萬葉集となづけられたりける。

かの御時より　年は百とせに餘り、世は十つぎになむなりにける。　ここにいにしへの事をも、歌の心をも知れる人、よむ人多からず、わづかに、一人二人なりき。　しかあれど、これかれ得たる所、得ぬ所、互になむある。　いまこの事をいふにつかさ位たかき人をば、たやすきやうなれば入れず。　そのほかに、近き世にその名聞えたる人は、即ち、僧正遍昭は、歌の

さまは得たれども、まことすくなし。たとへば、繪に書ける女を見て、いたづらに、心を動かすが如し。在原業平は、その心あまりて、言葉たらず、いはばしぼめる花の色なくて匂のこれるが如し。文屋康秀は、詞はたくみにて、そのさま身におはず。いはば、あき人の、よき衣著たらむが如し。宇治山の僧喜撰は、詞幽にして、はじめをはりたしかならず。いはば、秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し。よめる歌多く聞えねば、これ彼れを通はしてよくしらず。小野小町は、あはれなるやうにて、強からず。いはば、よき女の、惱めるところあるに似たり、つよからぬは、をうなの歌なればなるべし。大友黒主は、心はをかしくて、そのさまいやし、いはば、たき木負へる山人の、花の陰にやすめるが如し。このほかの人々その名きこゆる、野邊に生ふるかづらの這ひひろごり、林に

○すべらきの――醍醐天皇をさす。

○四つの時云々――春夏秋冬が、九度くり返す。即ち九年になる也。

○筑波山の麓よりも――集中一筑波山このもかのもの歌による。

○梅をかざすより云々――四季の歌をいへり。

○鶴亀につけて云々――賀の歌をいへり。

しげき木の葉のごとく多かれど、歌とのみ思ひて、そのさま知らぬなるべし。

かかるに、今すべらぎの天の下しろしめすこと、四つの時九のかへりになむなりぬる。治きおほんうつくしみの波、八洲の外まで流れ、廣きおほんめぐみの蔭、筑波山の麓よりもしげくおはしまして、よろづの政を聞しめすいとま、もろもろの事をすて給はぬあまりに、古への事をも忘れじ、舊りにし事をもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐のさう官凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑らに仰せられて、萬葉集に入らぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。それが中に梅をかざすよりはじめて、時鳥を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまて又鶴亀につけて

○秋萩夏草云々――戀歌をいへり。
○逢坂山に云々――羇旅送別の歌をかねていへり。
○春夏秋冬にも入らぬ云々――雜歌その他をすべていへり。

○飛鳥川の云々――集中「世の中は何か常なる」の歌による。
○さゞれ石の云々――集中「わが君はちよにましませ」の歌による。

君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩夏草を見て、妻を戀ひ、逢坂山にいたりて手向を祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ選ばせ給ひける。すべてちうたはた卷名づけて、古今和歌集といふ。

かく、この度あつめ選ばれて、山した水のたえず、濱の眞砂かず多くつもりぬれば、今は、飛鳥川の、瀬になる恨も聞えず、さゞれ石の巖となるよろこびのみぞあるべき。それまくら詞は、春の花匂すくなくして、空しき名のみ、秋の夜の長きをかこてれば、かつは、人の耳におそり、かつは、歌の心にはぢ思へど、たなびく雲の立ちぬ、啼く鹿のおきふしは、貫之らが、この世に生まれて、この事の時にあへるをなむ喜びぬる。人麻呂なくなりにたれど、歌のこととどまれるかな。たとひ、時移り事去り、たのしび悲びゆきかふとも、この歌の文字あ

るをや。青やぎの絲絶えず、松の葉の散り失せずして、まさ木のかづら長く傳はり、鳥の跡久しくとどまれらば、この歌のさまをも知り、事の心をも得たらむ人は、大空の月を見るが如くに、古へを仰ぎて、今を戀ひざらめかも。

古今和歌集

○前年の十二月中に立春のあることあるなり。

○この歌まことに理つよく、又をかしくもきこえてありがたくよめる歌なり。（古來風體抄）

○この歌古今にとつて心もことばもめでたくきこゆる歌なり。（同）

○歌のたけすがたなどいみじく待る云々（同）

春

ふる年に春立ちける日よめる　在原ゆき方

年の内に春はきにけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

春立ちける日よめる　紀貫之

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

題しらず　讀人しらず

春がすみ立てるやいづこみよし野のよしの〻山に雪はふ

りつゝ

題しらず　讀人しらず

梅が枝にきゐる鶯はるかけて鳴けどもいまだゆきはふりつゝ

○これらは今の世にもいみじくおかし。（同）

雪の木にふりかゝれるをよめる　素性法師

春立てば花とや見らむしら雪のかゝれる枝にうぐひすのなく

○これ又いみしくおかしきを、見らむのことばは今の世にはすこし用ゐがたきなり。（同）

雪の降りけるをよめる　紀貫之

かすみ立ち木の芽もはるの雪ふれば花なき里も花ぞちりける

○このめもはる――木の芽の張ると春とをかげた。

春のはじめの歌　壬生忠岑

春きぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞおもふ

寛平の御時后の宮の歌合の歌　源當純

谷風にとくる氷のひまごとにうち出るなみや春のはつはな

○たぐへて――伴はして。

○　紀友則

はなの香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

○家居しをれば、家居してれば、家居をすれば、ともあり。

○

鶯のたによりいづることゑなくば春くることをたれか知らまし　大江千里

題しらず　讀人しらず

野邊近く家居しをれば鶯のなくなる聲はあさなあさな聞く

春日野は今日はな燒きそ若草の妻もこもれりわれもこもれり

かすが野の飛火の野守いでて見よ今いくかありて若菜つみてむ

仁和のみかどみこにおはしましける時に人に若菜たまひける御歌

君かため春の野にいでてわかな摘むわが衣手に雪はふりつつ

歌たてまつれとおほせられし時、よみてたてまつれる　貫之

春日野の若菜つみにやしろたへの袖ふりはへて人のゆくらむ

寛平の御時后の宮の歌合に詠める　源宗于朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさり

○呼子鳥――諸説あり。

ける

歌奉れと仰せられし時詠みて奉れる貫　之

あをやぎの糸よりかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける

西大寺のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

あさみどりいとよりかけて白露を玉にもぬける春のやなぎか

題しらず　讀人しらず

をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな

梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける

春の夜の梅の花をよめる　躬恒

春の夜の闇はあやなし梅の花いろこそ見えぬ香やはかくるる

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しくやどらでほどへて後にいたれりければ彼の家のあるじかくさだかになむやどりはあるといひ出して侍りければそこにたてりける梅の花を折りてよめる　貫　之

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香ににほひ

ける

題しらず　　讀人しらず

ちりぬとも香をだに殘せ梅の花戀しきときの思ひ出にせむ

人の家に植たりける櫻の花咲きはじめたりけるを見てよめる　　貫之

ことしより春知りそむる櫻花ちるといふことは習はざらなむ

山櫻わが見にくればはるがすみ嶺にもをにもたちかくしつつ

染殿の后の御前に花瓶に櫻の花をさせ給へるを見てよめる　　前のおほきおほいまうち君

年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし

渚の院にて櫻を見てよめる　　在原業平朝臣

世の中にたえて櫻のなかりせば春のこころはのどけからまし

山の櫻を見てよめる　　素性法師

見わたせば柳さくらをこきまぜて都ぞはるのにしきなりける

歌奉れと仰せられし時によみてたてまつれる　貫之

櫻花咲きにけらしもあしびきの山のかひより見ゆるしらくも

○けらしもといへるもこの歌にはかきりなくめでたくきこゆ。（同）

櫻の花のさかりに久しくとはざりける人のきたりける時によめる　讀人しらず

あだなりと名にこそたてれ櫻花としにまれなる人も待ちけり

春歌　下

題しらず　讀人しらず

この里に旅寢しぬべし櫻ばなちりのまがひに家路わすれて

僧正遍昭によみておくりける　惟喬のみこ

櫻花ちらば散らなむ散らずとてふるさと人のきても見なくに

○このおほんうたすがたこのみこいかでかくはよみたまひけるにか。（同）

雲林院にて櫻の花をよめる　そうく法師

いざ櫻我もちりなむひとさかりありなば人にうきめ見えむともある。

○見えなむ――見せな

なむ

山の櫻を見てよめる　貫之

春がすみなにかくすらむ櫻花ちるまをだにも見るべきものを

散りがたになれりけるを見てよめる　藤原よるかの朝臣

たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり

櫻の花のちりけるをよめる　貫之

ことならば咲かずやはあらぬ櫻花みるわれさへにしづ心なし

○いかにちれとか——いかにせよとかともある。

さくらの花のちるをよめる　紀友則

久かたのひかりのどけきはるの日にしづ心なく花のちるらむ

櫻のちるをよめる　凡河内躬恒

ゆきとのみ降るだにあるを櫻花いかにちれとか風の吹くらむ

ひえに登りて歸りまうできて詠める　貫之

山たかみ見つつわがこし櫻花かぜはこころにまかすべらなり

○古來風體抄には花ぞさきけるとあり。

○三輪山――大和國磯城郡

ならみかどの御うた

ふるさとゝなりにしならの宮こにもいろはかはらず花はさきけり

題しらず　讀人しらず

春のいろの到り到らぬ里はあらじ咲けるさかざる花の見ゆらむ

春のうたとてよめる　貫之

三輪山をしかもかくすか春がすみ人にしられぬ花やさくらむ

○もとに――ともにともあり。

○雲林院の云々――常康親王。

○さかり――にほひともあり。

○ことは命なりけり――ことの命のみなるともあり。

雲林院の皇子のもとに花見に北山のほとりにまかれりける時によめる

いざけふは春の山邊にまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは

題しらず　讀人しらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

花のごと世の常ならばすぐしてし昔はまたもかへり來なまし

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原元方

○ふる――「降る」と「経る」。
○ながめ――「長雨」と「眺め」とをかく。
○志賀の山越――北白川より志賀に越ゆる道なり。

かすみたつ春の山邊は遠けれど吹きくる風は花の香ぞする　　二八

題しらず　　讀人しらず

散る花を何か恨みむ世の中にわが身もともにあらむものかは

題しらず　　小野小町

花の色は移りにけりな徒に我が身世にふるながめせしまに

志賀の山越にをんなの多くあへりけるによみてつかはしける　　貫之

梓弓はるのやまべを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

春の野に若菜つまむとこしものを散りかふ花に道はまどひぬ

山寺に詣てたりけるによめる

やどりして春の山邊にねたる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

家に藤の花咲けるを人の立ちとまりて見けるをよめる　　躬恒

我が宿にさける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらむ

題しらず　　讀人しらず

今もかも咲きにほふらむたちばなのこじまのさきの山吹の花

○橘の小島――山城國宇治川に山吹瀬といふあり。とい大和國高市郡飛鳥の橘の島といふ。

春の歌とてよめる　　素性

思ふどち春の山邊にうちむれてそこともいはぬ旅寢してしが

やよひのつごもりがたに山を越えけるに山川より花の流れけるをよめる　　深養父

花ちれる水のまにまにとめくれば山にも春はなくなりにけり

○花ちれる――花のちるともあり。

やよひのつごもりの日花つみより歸りける　　躬恒

女どもを見てよめる

とどむべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

○物とはなしに――物ならなくにともある

やよひのつごもり雨のふりけるに藤の花ををりて人につかはしける　　なりひらの朝臣

ぬれつゝぞしゐてをりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

○しゐてといふことばに、すがたもこゝろもいみじくなり侍るなり。歌はたゞ一ことばにいみじくもふかくもなるものに侍るなり。（古來風躰抄）

亭子院の歌合に春のはての歌　躬恒

今日のみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげかは

夏歌

題しらず　讀人しらず

我がやどの池の藤波さきにけり山ほとゝぎすいつか來なかむ

○いつか――いまやともあり

題しらず　伊勢

五月こばなきもふりなむ郭公まだしきほどのこゑをきかばや

○まだしきほどの――まだしきときのともあり

さつき待つ花たちばなの香をかげば昔のひとの袖の香ぞ　讀人しらず

○音羽山――山城國山科といふ。

する

いつのまに五月きぬらむあしびきのやま郭公いまぞ鳴くなる　紀友則

音羽山を越えける時に郭公の鳴くをききて

よめる

音羽山はさ越えくればほとゝぎす梢はるかに今ぞなくなる　紀友則

題しらず　讀人しらず

ほとゝぎすなく聲きけばわかれにし故郷さへぞ戀しかりける

郭公ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　紀友則

さみだれに物思ひをれば郭公夜ぶかく鳴きていづち行くらむ　紀貫之

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑに明くるしのめ

早くすみけるところにて郭公のなきけるを

聞きてよめる　忠岑

むかしべや今も戀しきほとゝぎす故郷にしもなきてきつ

らむ

蓮の露を見てよめる　僧正遍正

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

秋歌

秋立つ日よめる　藤原敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

秋立つ日うへのをのこども賀茂の川原に川逍遙しけるともにまかりてよめる　貫之

川風のすゞしくもあるかうちよする波とともにや秋は立つらむ

○秋は――秋のともあり

題しらず　よみ人しらず

○稲葉もそよにとも稲葉もそよととともあり。

○あまの河原――あまの河波ともあり。

我せこがころもの裾をふきかへしうらめづらしき秋のはつ風　　三八

昨日こそさなへとりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風ぞ吹く

秋風の吹きにし日より久かたのあまの河原にたたぬ日はなし

題しらず　　よみ人しらず

木の間よりもりくる月のかげ見れば心づくしの秋は来にけり

大かたの秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ

物ごとに秋ぞ悲しきもみぢつつ移ろひゆくをかぎりと思へば

ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くる宵はつゆけかりけり

○をしと思ふ夜――をしみするよとも。

これさだのみこの家の歌合の歌

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりなりける

かんなりのつぼに人々集りて秋の夜をしむ

歌よみけるついでによめる　　躬恒

かく許りをしと思ふ夜をいたづらに寝て明すらむ人さへぞうき

○かず――かげともあり、古來兩說あるなり。

題しらず　讀人しらず

しら雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへみゆる秋の夜の月

さよなかと夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月渡るみゆ

是貞のみこの家の歌合によめる　大江千里

月見ればちぢに物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

久かたの月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ　忠岑

月をよめる　在原元方

秋の夜の月の光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり

人のもとにまかれりける夜きりぎりすの鳴きけるを聞きてよめる　藤原忠房

墓いたくな鳴きそあきの夜のながきおもひはわれぞまされる

題しらず　よみ人しらず

秋の野に人まつ虫の聲すなりわれかと行きていざとぶらはむ

蜩のなきつるなべに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞあり

○思ふは――おもへばともあり。

○いなおほせ鳥――田の畔などにゐて秋鳴くといふ、餘材抄にくはし。

ける

ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風よりほかにとふ人もなし

題しらず　　讀人しらず

我が門に稲おほせ鳥の鳴くなべにけさ吹く風に雁は來にけり

春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋ぎりのうへに

是貞のみこの家の歌合の歌　　忠岑

山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音にめをさましつつ

おくやまに紅葉ふみわけなく鹿の聲きくときぞ秋はかなしき　　讀人しらず

是貞のみこの家の歌合によめる　　藤原敏行朝臣

秋萩のはな咲きにけりたかさごのをのへの鹿は今やなくらむ

題しらず　　よみ人しらず

萩が花ちるらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも

是貞のみこの家の歌合によめる　　文屋朝康

秋の野におく白露はたまなれやつらぬきかくるくもの糸
すぢ

朱雀院の女郎花合に詠みて奉りける　左のおほいまうち君

をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによす
らむ

ふぢばかまをよめる　素性

ぬししらぬ香こそにほへれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴
ぞも

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

秋の野のくさのたもとか花薄ほにいでてまねく袖とみゆ
らむ

題しらず　讀人しらず

月草に衣はすらむあさ露にぬれてののちはうつろひぬと
も

○萬葉集にあり。

秋歌下

題しらず　　讀人しらず

霧たちて雁ぞなくなる片岡のあしたのはらはもみぢしぬらむ

石山に詣てける時音羽山の紅葉を見てよめる　　貫之

秋風の吹きにし日よりおとは山みねのこずゑも色づきにけり

もる山のほとりにてよめる　　貫之

しらつゆも時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

神の社のあたりをまかりける時にいがきのうちの紅葉を見てよめる　　貫之

ちはやぶる神のい垣にはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり

○うつろひにけり、いろづきにけりとも。

大和の國にまかりける時佐保山にきりのたてりけるを見てよめる　　紀友則

たがための錦なればか秋霧のさほのやまべをたちかくすらむ

○元永本なし。

○この歌、ぬれてほすとおけるの五もじの、ことにめでたく待るに、又山路の菊の露のまにいつかたのもあるべくつづけて待るにより、何とかなくひかれるもいみじくきこゆる句なり。（同）

是貞のみこの家の歌合のうた　　四八　　讀人しらず

秋霧は今朝はなたちそさほやまの柞のもみぢよそにても見む

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　　素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年をわれは經にけむ

白菊の花をよめる　　凡河内躬恒

こころあてに折らばやをらむ初霜の置きまどはせる白菊の花

題しらず　　よみ人しらず

さほ山の柞のもみぢ散りぬべみよるさへ見よと照らす月かげ

題しらず　　讀人しらず

龍田川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山にしぐれ降るらし

又はあすか川もみぢ葉流る

秋は來ぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

秋の月やまべさやかにてらせるはおつる紅葉の數を見よとか

○佐保山――大和國添上郡。

○龍田川――大和國平群郡。

○おつる紅葉――ちるもみぢばのともあり。

○よわからし――もろからしともあり。

霜のたて露のぬきこそよわからしやまの錦の織ればかつちる　關雄

二條の后の春宮の御息所と申しける時に御屏風に龍田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを題にてよめる　業平朝臣

○神代もきかず龍田川といへるわたりのめでたきなり。（同）

ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くくるとは

志賀の山越にてよめる　春道列樹

山川に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり

池のほとりにて紅葉のちるをよめる躬恒

風ふけばおつるもみぢ葉水きよみちらぬ影さへ底に見えつつ

なが月のつごもりの日大井にてよめる　つらゆき

ゆふづくよをぐらの山になくしかのこゑのうちにや秋はくるらむ

○秋のくるらむともあり。

○さびしさ――わびしさともあり。

○みゆきふるらし――ふりつゝともあり。

冬歌

冬の歌とてよめる　源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば

題しらず　よみ人しらず

おほ空の月の光しきよければ影みし水ぞまづこほりける

夕されば衣手さむしみよしのの吉野の山にみゆきふるらし

ふる雪はかつぞけぬらし足びきの山の瀧つ瀬おとまさるなり

我が宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ

冬の歌とてよめる　紀貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬはなぞ咲きける

奈良の京にまかりける時に宿りける所にて　坂上是則

よめる

みよしのの山のしら雪つもるらし故郷さむくなりまさるなり

寛平の御時后の宮の歌合の歌　壬生忠岑

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ　五四

雪のふりけるをよみける　清原深養父

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

雪の木に降りかゝれりけるを詠める貫之

冬ごもり思ひかけぬを木のまより花と見るまで雪ぞ降りける

大和の國にまかれりける時に雪のふりけるを見てよめる　坂上是則

あさぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里に降れる白ゆき　よみ人しらず

題しらず

梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれゝば　紀とものり

雪のふりけるを見てよめる

雪ふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきてをらまし　みつね

物へまかりける人をまちてしはすのつごもりによめる

○おとづれもせぬともあり

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　よみ人知らず

雪ふりてとしのくれぬる時にこそついにもみぢぬ松もみえけれ

としのはてによめる

昨日といひけふとくらしてあすかゞはながれてはやき月日なりけり

○千代に八千代に――千代にましませともあり。

○君がちとせの――君がへむよのともあり。

賀歌

題しらず　よみ人しらず

我が君は千世に八千世にさざれ石の巌となりて苔のむすまで

わだつ海の濱の眞砂を數へつつ君が千とせのありかずにせむ

さだときのみこのをばのよそぢの賀を大井にてしける日よめる　きのこれをか

かめのをの山のいはねをとめておつる瀧の白玉千世のかずかも

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風
によみて書きける　素性法師
ふして思ひおきてかぞふる萬世は神ぞしるらむわが君の
ため

内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀し
ける時に四季の繪かける後の屏風にかきた
りける歌　素性法師

春
かすが野に若菜つみつゝ萬代をいはふこころは神ぞしる
らむ

秋　躬恒

すみの江の松をあきかぜ吹くからに聲うちそふる沖つし
ら波

冬　貫之
白雪の降りしくときはみよしののやました風に花ぞちり
ける

○この歌あまりにそくさりゆきたれど、すがたをかしきなり。（風體抄）

離別歌

題しらず　　在原行平朝臣

立ちわかれいなばの山の嶺に生ふるまつとしきかば今歸りこむ

すがるなく秋のはぎはら朝たちて旅行く人をいつとか待たむ　　よみ人しらず

かぎりなき雲井のよそにわかるとも人を心におくらさむやは

をのゝちふるがみちのくのすけにまかりける時にはゝのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなとどめそ

常陸へまかりけるときに藤原公利によみて　　龍

つかはしける

朝なけに見べききみとしたのまねばおもひたちぬる草枕なり

友のあづまへまかりける時によめる　良岑ひてをか

しらくものこなたかなたにたち別れ心をぬさとくだく旅かな

みちのくにへまかりける人によみて遣しける　貫之

白雲のやへにかさなるをちにても思はむ人にこころへだつな

音羽山のほとりにて人別るとてよめる　貫之

おとはやまこだかくなきて郭公きみがわかれを惜むべらなり

藤原の後蔭がから物の使に長月のつごもり方にまかりけるに上のをのこども酒たうびけるついでによめる　藤原かねもち

もろともになきてとゞめよきりぎりす秋のわかれはをしくやはあらぬ

秋霧のともに立ちいでて別れなば晴れぬ思にこひやわたらむ　とものり

源のさねがつくしへ湯あみむとてまかりける時に山崎にてわかれ惜みける所にてよめる　しろめ

いのちだに心にかなふものならば何かわかれの悲しからまし

○もとのりともあり。
○こひやーーもえやともあり。

今は是より歸りぬとさぬがいひけるをりに
よみける　藤原かねもち

慕はれて來にし心の身にしあれば歸るさきには道も知られず

大江の千古が越へ罷りける馬の餞によめる　藤原兼輔朝臣

君が行くこしの白山しらねども雪のまにまにあとはたづねむ

山に登りて歸りまうてきて人々別れけるついでによめる　幽仙法師

わかれをば山の櫻にまかせてむとめむとめじは花のまに

○來にし――君にともあり。

まに

雲林院のみこの舍利會に山に登りて歸りけるに櫻の花のもとにてよめる　幽仙法師

ことならば君留るべく匂はなむ歸すは花の憂きにやはあらぬ

かむなりのつぼにめしたりける日おほみきなどたうべてあめのいたうふりければゆふさりまで侍りてまかりいでけるをりにさかづきをとりてつらゆき「秋はぎの衣をばあめにぬらせども君をばましてをしとこそおもへ」とよめりける返し　兼覽王

○いづれを――いづれかともあり。

○この歌、むすふてのとをけるより、しづくにごる山の井のあかでもなといひて、あかで大かたすべてことのはこのつぎりなく待るなるべし、歌の本體はたゞこの歌なるべし。（風體抄）

をしむらむ人の心をしらぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

六六

題しらず　よみ人しらず

しひて行くひとをとどめむ櫻花いづれを道とまどふまでちれ

志賀の山越にて石井のもとにて物いひける　貫之

人の別れける所にてよめる

むすぶ手の雫ににごる山の井のあかでも人にわかれぬるかな

道にあへりける人のくるまに物をいひつき

てわかれけるところにてよめる

したのおびのみちはかたがたわかるともゆきめぐりてもあはむとぞおもふ

○人にはつげよといへるすがたこゝろたゞひなく待るなり。（風體抄）

○柿本朝臣人麿歌なりこの歌上古、中古、末代まで相叶へる歌なり（同）

旅歌

おきのくにゝながされける時にふねにのり

ていでたつとて京なる人のもとにつかはし

小野篁朝臣

けるわだの原八十島かけてこぎいでぬと人には告げよ蜑のつり舟

題しらず　よみ人しらず

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆくふねをしぞおもふ

この歌はある人のいはく柿本人麿がなり

あづまの方へ友とする人一人二人いざなひていきけり三河國八橋といふ所にいたれりけるにその川のほとりに杜若いと面白うさけりけるを見て木の陰におりゐて杜若といふ五文字を句のかしらにすゑて旅の心をよまむとてよめる　在原業平朝臣

唐衣きつつなれにし妻しあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ

武藏の國と下總の國との中にある隅田川の邊に到りて都のいと戀しう覺えければしし川のほとりにおりゐて思ひやれば限りなく遠くも來にけるかなと思ひわびてながめ

○なくしも――なきにしもともあり。

をるに渡守はや舟に乗れ日も暮れぬといひければ舟に乗りて渡らむとするに皆人物わびしくて京に思ふ人なくしもあらずさる折に白き鳥のはしと足と赤き川のほとりに遊びけり京には見えぬ鳥なりければ皆人見しらず渡守にこれは何鳥ぞと問ひければこれなむ都鳥といひけるを聞きてよめる

名にしおはばいざことはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと

あづまへまかりける時道にてよめる　貫之

糸によるものならなくに別れ路の心ぼそくもおもほゆるかな

甲斐の國へまかりける時道にてよめる　躬恒

夜をさむみ置くはつ霜をはらひつつ草の枕にあまたたびねぬ

たぢまのくにのゆへまかりける時にふたみのうらといふところにとまりてゆふさりのかれいひたうべけるにともにありける人々うたよみけるついでによめる　ふぢはらのかねすけ

ゆふづくよおぼつかなきをたまくしげふたみのうらはあけてこそ見め

惟喬のみこのともに狩にまかりける時に天の川といふ所の川のほとりにおりゐて酒などのみけるついでに皇子のいひけらく狩して天の川原にいたるといふ心をよみて盃はさせと云ひければよめる　在原業平朝臣

狩り暮したなばたつめに宿からむ天の川原にわれは來にけり

朱雀院のならにおはしましける時にたむけ山にてよみける　すがはらの朝臣

このたびはぬさもとりあへずたむけ山もみぢのにしき神のまにまに

○時にの下に、ともにつかうまつりてとあるもあり。

物名

たちばな　小野しげかげ

足引の山たちはなれゆく雲のやどり定めぬ世にこそありけれ

山がきの木　讀人しらず

秋はきぬ今やまがきのきりぎりす夜な夜ななかむ風の寒さに

朱雀院の女郎花あはせの時にをみなへしといふ五文字を句のかしらに置きてよめる

つらゆき

をぐらやまみねたちならしなくしかのへにけむ秋をしる
人ぞなき

讀人しらず

しをに

ふりはへていざ故郷の花見むとこしをにほひぞ移ろひに
ける

文屋のやすひて

二條の后春宮の御息所と申しける時にめど
にけづり花させりけるをよませ給ひける

花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこのみなる
時もがな

〇なる時もかな――なるよしもなくともあり。

きのときさだ

しのぶぐさ

山高みつねにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞ散り
ける

安倍清行朝臣

からことといふ所にて春の立ちける日よめ
る

波のおとのけさからことにきこゆるは春のしらべやあら
たまるらむ

戀歌一

題しらず　よみ人しらず

郭公鳴くやさつきのあやめ草あやめも知らぬこひもするかな

紀つらゆき

吉野かはいはなみたかくゆく水のはやくぞ人を思ひそめてし

春日の祭にまかりける時に物見に出てたりける女のもとに家を尋ねて遣しける　壬生忠岑

○かも……はもともあり。

○花つみ――花みともあり。

春日野の雪まを分けておひ出くる草のはつかに見えし君かも

人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとに後によみてつかはしける　貫之

山櫻かすみのまよりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ

題しらず　よみ人しらず

あしびきの山下みづのこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

○このうたは伊勢物語

戀せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずぞなりにけら

のうたなり、なりひらの朝臣のうたにやおぼつかなし、いかにもめでたきうたとも也（風體抄）

○うげずぞ以下うけずもなりにけるかなともあり。

○方もなし――方しらずともあり。

○見えつゝ――見ゆるはとも。

しも
よひよひに枕さだめむ方もなしいかにねし夜か夢に見え
けむ
ゆく水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなり
けり
戀ひ死ねとする業ならしむば玉の夜はすがらに夢に見え
つつ
蘆鴨のさわぐ入江のしらなみの知らずや人をかくこひむ
とは
あふさかの關に流るゝいはしみずいはで心におもひこそ
すれ
夏虫の身をいたづらになす事も一つおもひによりてなり
けり

○戀ひずしもあらぬ――戀をせざらむとも、戀ひずしもあらむともあり。

いつとても戀しからずはあらねども秋の夕はあやしかり
けり
人めもる我かはあやな花すゝきなどかほにいでゝ戀ひず
しもあらぬ

戀歌 二

題しらず　小野小町

思ひつつぬればや人の見えつらむ夢としりせば覺めざらましを

うたたねに戀しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき

いとせめて戀しきときはむば玉のよるの衣をかへしてぞきる

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原敏行朝臣

住の江のきしによる波よるさへや夢のかよひ路人目よくらむ

壬生忠岑

かきくらし降る白雪のしたぎえにきえて物思ふころにもあるかな

素性法師

題しらず

はかなくて夢にもひとを見つる夜は朝の床ぞおきうかりける

凡河内躬恒

秋霧のはるる時なきこころにはたちゐの空もおもほえなくに

○時なき——時なしともいふ

○はかなく――あやなくともあり。

題しらず

秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人のこひしかるらむ　　八二　忠岑

題しらず

よひよひにぬぎて我がぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし　　友則

あづまぢのさやの中山なかなかになにしか人を思ひそめけむ

ことにいでゝいはぬばかりぞみなせ川したにかよひて戀しきものを　　友則

風ふけばみねにわかるる白雲のたえてつれなき君がこころか　　忠岑

命にもまさりて惜しくある物はみはてぬ夢のゝむるなりけり

戀歌 三

やよひのついたちよりしのびに人に物をいひて後に雨のそぼ降りけるに詠みて遣しける　　業平朝臣

起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮しつ

題しらず　　よみ人しらず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君がかげとなりにき

この歌はある人の曰く柿本人麿が歌なり　　小野小町

みるめなきわが身を浦としらねばやかれなてあまのあしたゆく來る

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別よりあかつきばかり憂きものはなし

元方

人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今も知らずとをいはむ

東の五條わたりに人を知りおきて罷り通ひけり。忍びなる所なりければ門よりしもえいらで垣のくづれより通ひけるを、たび重りければあるじ聞きつけて、かの道に夜毎に人をふせて守らすれば、いきけれどえあはでのみ歸りてよみてやりける　業平朝臣

人しれぬ我が通ひ路の關守はよひよひごとにうちもねなむ

題しらず　貫之

忍ぶれどこひしき時はあしびきの山より月のいでてこそくれ

○逢ふといへば――あひしあへばともあり。

○悲しき――わびしきともあり。

○いやはかなにも――おぼつかなくもとも。

秋の夜も名のみなりけり逢ふといへば事ぞともなく明けぬる物を　小野小町

しののめのほがらほがらと明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき　よみ人しらず

題しらず　よみ人しらず

ほととぎす夢かうつつか朝露のおきて別れしあかつきのこゑ

人に逢ひてあしたによみて遣しける　業平朝臣

ぬぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり

増るかな

業平朝臣の伊勢の國にまかりける時齋宮なりける人にいとみそかに逢ひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりける間に女のもとよりおこせたりける　よみ人しらず

君やこしわれやゆきけむおもほえず夢か現かねてか覺めてか

題しらず　よみ人しらず

むば玉の闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

○もる――よくともあり、わびしさ――すべなさともあり。

○かざりなきおもひのまゝに夜は來む夢ぢにさへや人はとがめむともあり。

○かねては――かねてやともあり。

○いでぬべし――いでぬべきともあり。

題しらず　小町

現にはさもこそあらめ夢にさへひとめをもるとみるがわびしさ

限なきおもひのまゝによるもこむ夢路をさへに人はとがめじ

夢路には足もやすめず通へども現にひとめ見しことはあらず

題しらず　友則

したにのみ戀ふれば苦し玉の緒の絶えて亂れむ人なとがめそ

わが戀を忍びかねては足引の山たちばなのいろにいでぬべし

戀歌 四

題しらず　よみ人しらず

みちのくの淺香の沼の花かつみかつ見る人に戀ひやわたらむ

○戀ひやらむ――戀しきやなぞともあり。

伊勢

夢にだに見ゆとはみえじ朝な朝な我が面影にはづる身なれば

○見えじ――いはじともあり。

讀人しらず

石間ゆく水の白波立ち返りかくこそは見めあかずもあるかな

○あかずもあるかな――あかぬ君かなともあり。

友則

春霞たなびく山のさくらばな見れどもあかぬ君にもあるかな

凡河内躬恒

かれはてむのちをばしらず夏草のふかくも人のおもほゆるかな

○知らず――知らでとも。

讀人しらず

君やこむわれやゆかむのいさよひに槙の板戸もささずねにけり

○ゆかむの――ゆくべきとも。

今こむといひしばかりに長月の有明の月を待ちいてつる
かな

素性法師

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たず
しもあらず

讀人しらず

君こずばねやへもいらじこ紫わがもとゆひにしもはおく
とも

藤原敏行の朝臣の業平の朝臣の家なりける女をあひ知りて文遣せりける言葉に今まうてく雨の降りけるをなむみわづらひ侍ると

いへりけるを聞きてかの女にかはりてよめりける

在原業平朝臣

數々に思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

題しらず

讀人しらず

須磨のあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

題しらず

讀人しらず

忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ戀しき

淀川のよどむと人は見るらめどながれてふかき心あるも

○須磨のあまの――須磨のうらにともあり。

○まづぞ戀しき――ものぞ悲しきともあり。

のを

そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波は
たて　　素性法師

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れむと思ふわれならな
くに　　河原左大臣

○亂れむと思ふ――亂れそめにしともあり。

題しらず

故郷にあらぬものからわがためにひとの心のあれてみゆ
らむ　　伊勢

題しらず

形見こそ今はあだなれこれなくば忘るる時もあらましも
のを　　讀人しらず

○月やあらぬといひ、春やむかしのなどつゝけたるほどのかぎりなくめでたきなり。（古來風體抄）

戀歌五

五條のきさいの宮の西の對に住みける人に
ほいにはあらでものいひ渡りけるを睦月の
十日あまりになむ外へ隱れにけるあり所は
聞きけれどえ物もいはで又の年の春梅の花
ざかりに月の面白かりける去年をこひてか
の西の對にいきて月の傾くまであばらなる
板敷にふせりてよめる　在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身に
して

題しらず　藤原仲平朝臣

花薄われこそしたに思ひしかほに出てひとにむすばれに
けり　讀人しらず

花がたみめならぶ人の數多あれば忘られぬらむ數ならぬ
身は　伊勢

逢ひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへぬるるがほ
なる　讀人しらず

暁のしぎのはねがきもも羽がき君がこぬ夜はわれぞかずかく

山の井のあさき心もおもはぬをかげばかりのみ人の見ゆらむ

僧正遍昭

我が宿は道もなきまであれにけりつれなき人を待つとせしまに

讀人しらず

こめやとは思ふ物からひぐらしのなく夕暮はたち待たれつつ

月夜にはこぬ人またるかき曇り雨もふらなむ佗びつつもねむ

こぬ人をまつ夕ぐれの秋風はいかにふけばかわびしからむ

仲平の朝臣あひしりて侍りけるをかれがたになりにければ父が大和の守に侍りけるもとへまかるとてよみて遣しける　伊勢

三輪の山いかに待ちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

題しらず　雲林院のみこ

吹きまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人のこころ

あひしれりける人のやうやくかれがたになりけるあひだにやけたるちの葉に文をさしてつかはせりける　小町が姉

時すぎて枯れゆく小野の淺茅には今はおもひぞ絶えずもえける

物思ひける頃物へまかりける道に野火のもえけるを見てよめる　伊勢

冬枯の野邊と我が身を思ひせばもえても春をまたましものを

題しらず　躬恒

よしの川よしや人こそつらからめ早くいひてしことは忘れじ

○忘れずともあり。

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすきいろにぞありける　讀人しらず

色みえてうつろふものは世の中のひとの心の花にぞありける　小町

思ふともかれなむ人をいかゞせむあかず散りぬる花とこそ見め　素性法師

題しらず

蜑のかる藻に住む蟲の我からとねをこそなかめ世をば恨みじ

一〇二

典侍藤原直子朝臣

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

すがのゝたゞおむつれなきをいまはこひじとおもへども心よわくもおつるなみだか

よみ人しらず

あら小田をあらすきかへし返しても人の心を見てこそやまめ

秋風のふきうらがへす葛の葉のうらみても猶うらめしきかな

平貞文

一〇三

哀傷歌

堀川のおほきおほいまうち君身まかりにける時に深草の山にをさめて後に詠みける　僧都勝延

うつせみはからを見つつもなぐさめつ深草のやま煙だにたて

○うつせみのともあり。

深草の野邊のさくらし心あらばことしばかりは墨ぞめにさけ　かむつけの岑雄

○野べの――山のともあり。

あひ知れりける人の身まかりにければよめる　紀貫之

夢とこそいふべかりけれ世のなかに現あるものと思ひけるかな

あひ知れりける人の身まかりにける時によめる　壬生忠岑

ぬるが内に見るをのみやは夢と言はむはかなき世をも現とはみず

ふぢはらのたゞふさがむかしあひしりて侍りける人の身まかりにける時に、とぶらひに遣すとてよめる　閑院

○戀しきものを――悲しきものをともあり。

○けふにあらすやともあり。

さきだたぬくいのやちたび悲しきは流るる水のかへりこぬなり　一〇六

紀友則が身まかりにける時よめる　貫之

明日知らぬわが身と思へど暮れぬまのけふは人こそ悲しかりけれ

時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに戀しきものを　忠岑

深草の帝の御國忌の日よめる　文屋康秀

草深き霞の谷にかげかくし照る日のくれし今日にやはあらぬ

深草の帝の御時に藏人の頭にてよるひるなれつかうまつりけるを諒闇に成りにければ更に世にもまじらずして比叡の山に登りてかしらおろしてけりその又の年みな人御ぶくぬぎてあるはかうぶり給はりなどよろこびけるを聞きてよめる　僧正遍昭

みな人ははなの衣になりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ

藤原のたかつねの朝臣の身まかりての又の年の夏郭公のなきけるを聞きてよめる　一〇七

郭公けさなく聲におどろけば君にわかれしときにぞありける

河原の左のおほいまうちぎみの身まかりて後かの家にまかりてありけるに鹽釜といふ所のさまをつくれりけるを見てよめる

君まさで煙たえにししほがまのうら寂しくも見えわたるかな

藤原のとしもとの朝臣の右近中將にてすみ侍りけるざうしのみまかりてのち人もすまずなりにけるに秋の夜ふけてものよりまうてきけるついでに見いれければもとありしせんざいもいとしげくあれたりけるを見てはやくそこにすみ侍りければむかしを思ひやりてよみける　みはるのありすけ

君がうゑしひとむらすゝき虫のねのしげき野べともなりにけるかな

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりけるをいくばくもあらで女のみこの身まかりにける時にかのみこの住みける帳のかたびらのひもにふみをゆひつけたりけるを取りてみれば昔の手にてこの歌をなむ書きつ

けたりける

かずかずにわれを忘れぬものならば山の霞をあはれとは見よ

一一〇　讀人しらず

やまひして弱くなりける時によめる　業平朝臣

終に行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを

甲斐の國にあひ知りて侍りける人とぶらはむとてまかりけるを道なかにてにはかに病をしていまいまとなりにければよみて京にもてまかりて母に見せよといひて人につけ侍りける歌　在原滋春

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今はかぎりのかどでなりけり

題しらず　よみ人しらず

わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる船のかいのしづくか

かぎりなき君がためにとをる花はときしもわかぬものにぞありける

紫のひともとゆゑに武藏野のくさはみながらあはれとぞ見る

二條のきさきのまだ東宮のみやすん所と申しける時におほはらのにまうて給ひける日

なりひらの朝臣

よめる

おほはらやをしほの山もけふこそは神世のこともおもひいづらめ

よしみねむねさだ

五節のまひゝめを見てよめる

あまつかぜ雲のかよひぢふきとぢよをとめのすがたしばしとゞめむ

けんけい法師

女どもの見て笑ひければよめる

かたちこそみやまがくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ

題しらず　よみ人しらず

我が心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を
見て

一一四

業平朝臣

大方は月をもめてじこれぞこのつもれば人のおいとなる
もの

紀貫之

月おもしろしとて凡河内躬恒がまうてきた
りけるによめる
かつ見れどうくともあるかな月影のいたらぬ里もあらじ
と思へば

これたかのみこのかりしけるともにまかり
て、やどりにかへりてよひとよさけをのみ物
がたりをしけるに十一日の月もかくれなむ
としけるをりにみこ忍ひてうちへいりなむ
としければよみ侍りける

なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月のかくるゝか山の端にげていれず
もあらなむ

題しらず

よみ人しらず

いそのかみふるから小野のもとがしはもとの心はわすら
れなくに
いにしへのしづのをだまき賤しきもよきもさかりはあり
しものなり
かゞみ山いざたちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いや

一一五

しぬると

この歌はある人のいはく大伴黒主がなり

業平朝臣の母のみこ長岡に住み侍りける時に業平みやづかへすとて時々もえまかりとぶらはず侍りければしはすばかりに母のみこのもとよりとみの事とて文をもてまうてきたりあけて見ればことばはなくて有りける歌

老いぬればさらぬ別のありといへばいよいよ見まくほしき君かな

かへし　　業平朝臣

○住吉ともあり。

世のなかにさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため　　讀人しらず

題しらず

われ見てもひさしくなりぬすみのえのきしの姫松いく世経ぬらむ

たれをかも知る人にせむたかさごのまつも昔の友ならなくに　　藤原興風

題しらず

なにはがた汐みちくらしあま衣たみのの島にたづなきわたる　　讀人しらず

雜歌 下

題しらず　　讀人しらず

世のなかはなにか常なるあすか川きのふの淵ぞ今日は瀬となる

○今日は――今日のともあり。

幾世しもあらじ我が身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるる

○わが身のともあり。

文屋の康秀が三河のぞうに成りてあがた見にはえ出でたたじやと云ひやれりける返事によめる　　小野小町

佗びぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

○宿もかな――家もがなともあり。

題しらず　　よみ人しらず

山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり

白雲のたえずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそありけれ　　惟喬のみこ

み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ　　よみ人しらず

世にふればうさこそまされみ吉野の岩のかけみちふみならしてむ

いかならむ巖のなかに住まばかは世の憂きことの聞えこざらむ

○すまばかは――すまばかも。
○こざらむ――ざるべきともあり。

おなじ文字なき歌　　もののべのよしな

世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ

物おもひける時いときなき子を見てよめる　　凡河内躬恒

今更になに生ひいづらむ竹の子のうきふし繁きよとはしらずや

○生ひいづらむ――生ひづらむともあり。

田村の御時に事にあたりて津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に遣しける　　在原行平朝臣

わくらはにとふ人あらば須磨の浦にもしほたれつつわぶとこたへよ

惟喬のみこの許にまかり通ひけるをかしらおろして小野といふ所に侍りけるに正月にとぶらはむとてまかりたりけるに比叡の山の麓なりければ雪いと深かりけりしひて彼のむろにまかりいたりてをがみけるに徒然としていと物悲しくて歸りまうてきてよみて送りける　　業平朝臣

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見む
とは

題しらず　　讀人しらず

われを君難波の浦にありしかば憂きめをみつのあまとな
りにき

友だちの久しうまうでこざりけるもとに　　躬恒

よみて遣しける

水のおもにおふるさ月のうき草のうきことあれや根を絶
えてこぬ

こしなりける人につかはしける　　きのつらゆき

おもひやるこしのしら山しらねどもひとよも夢にこえぬ
よぞなき

題しらず　　讀人しらず

いざここに我が世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくも
をし

わがいほはみわの山もとこひしくばとぶらひきませ杉た
てるかど

荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人の音づれも
せぬ

逢坂のあらしの風はさむけれど行方しらねば佗びつつぞ

○わびつゝぞぬる――わびつゝぞふるともあり。

ぬる

題しらず　讀人しらず

風ふけばおきつ白浪にたつた山よはにやきみがひとりこゆらむ

ある人、この歌は、むかし大和の國なりける人のむすめにある人すみ渡りけりこの女おやもなくなりて家もわろくなりゆくあひだにこの男河内の國に人を相知りて通ひつつ、かれやうにのみなりゆきけり、さりけれどもつらげなるけしきも見えて河内へいくごとに男の心の如くにしつついだしやりければ、あやしと思ひてもしなきまにことごころもやあるとうたかひて月のおもしろかりける夜河内へいくまねにて前栽の中

にかくれて見ければ、夜ふくるまで琴をかきならしつつうちなげきてこの歌をよみてねにければ、これを聞きてそれよりまたほかへもまからずなりけりとなむいひつたへたる

歌めしける時に奉るとてよみておくに書きつけて奉りける　伊勢

山川のおとにのみ聞く百敷をみをはやながら見るよしもがな

○もえつゝとはに――もえてときはにともあり。

○かくなわに――たくたわにとも。

雜體

短歌

題しらず

あふことの　まれなるいろに　おもひそめ　讀人しらず
あまぐものはるゝ時なく　ふじのねの　わが身はつねに
おもへども　あふことかたし　なにしかも　もえつゝとはに
わだつみの　おきをふかめて　おもひてし　人をうらみむ
いたづらに　なりぬべらなり　ゆく水の　おもひはいまは
かくなわに　おもひみだれて　ふる雪の　たゆる時なく
おもへども　えふの身なれば　なほやまず　けなばけぬべく
あしびきの　山した水の　こかぐれて　おもひはふかし
たぎつ心を

○おくつゆの――おくしものとも。

○あまびこ――やまびこともあり。

○なくごとに――なくこゑにともあり。

たれにかも　あひかたらはむ　色にいでば　人しりぬべみ
すみぞめの　ゆふべになれば　ひとりゐて　あはれ〳〵と
なげきあまり　せんすべなみに　にはにいでゝ　たちやすらへば
しろたへの　衣のそでに　おくつゆの　けなばけぬべく
おもへども　なほなげかれぬ　はるがすみ　よそにも人に
あはむとおもへば

ふるうたたてまつりし時のもくろくのその

ながうた

つらゆき

ちはやぶる　神のみよより　くれたけの　世々にもたえず
あまびこの　おとはの山の　はるがすみ　おもひみだれて
さみだれの　空もとどろに　さよふけて　山ほとゝぎす
なくごとに　たれもねざめて　からにしき　たつたの山の

もみぢ葉を　見てのみしのぶ　神無月　しぐれしぐれて
冬の夜の　庭もはだれに　ふる雪の　なほきえかへり
としごとに　時につけつゝ　あはれてふ　ことをいひつゝ
きみをのみ　ちよにといはふ　世の人の　おもひするがの
ふじのねの　もゆるおもひも　あかずして　わかるゝなみだ
ふぢごろも　おれる心も　やちぐさの　ことのはことに
すべらぎの　ふるたてぬきとも　まき〳〵の　なかにつくすと
いせの海の　浦のしほがひ　ひろひあつめ　とれりとすれど
たまのをの　みじかき心　おもひあへず　なほあらたまの
としをへて　大宮にのみ　ひさかたの　ひるよるわかず
つかふとて　かへり見もせぬ　わがやどの　しのぶ草おふる
いたまあらみ　ふる春雨の　もりやしぬらん

○おれる心も――おれるたてぬきともあり。
○いたま――ひまともあり。

冬のながうた　凡河内躬恒

ちはやぶる　神無月とや　けさよりは　くもりもあへず
はつしぐれ　もみぢといもに　ふるさとの　よしのゝ山の
山あらしも　さむく日ごとに　なりゆけば　たまのをとけて
こきちらし　あられみだれて　しもごほり　いやかたまれる
にはのおもに　むら〳〵見ゆる　冬草の　うへにふりしく
しらゆきの　つもりつもりて　あらたまの　としをあまたも
すぐしつるかな

○はつしぐれ――うちしぐれともあり。
○としをもあまたともあり。

旋頭歌

題しらず　　讀人しらず

うちわたすをちかた人にものまをすわれそのそこにしろくさけるはなにの花ぞも

はつせ河ふるかはのべにふたもとあるすぎとしをへてまたもあひみむふたもとあるすぎ

誹諧歌

題しらず　　讀人しらず

むめの花見にこそきつれ鶯のひとく〳〵といとひしもをる

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原むねやな

秋かぜにほころびぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりす鳴く

題しらず　　平貞文

春の野のしげき草葉のつま戀にとびたつ雉のほろろとぞ

なく

蟬の羽のひとへにうすき夏衣なればよりなむものにやは
あらぬ　躬恒

ことならば思はずとやはいひ果てぬなぞ世のなかの玉襷
なる　讀人しらず

われを思ふ人を思はぬむくいにやわが思ふ人のわれを思
はぬ

○むくいにや――つみとてやともあり。

なかき

くもはれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこそや
まめ　伊勢

難波なるながらの橋もつくるなり今は我が身を何にたと
へむ　讀人しらず

なげきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべ
らなり　讀人しらず

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさ
しき

○この歌は、ながらの橋くちにしのちまたつくらざれども、橋はつくりつづくべきものなるゆへに、つくるなりとよめるが、又誹諧の心にて侍也。（風體抄）

○かねて――かけてともあり。

大歌所御歌

おほなほびの歌

あたらしき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ

日本紀にはつかへまつらめよろづ代までに

ふるきやまと舞のうた

しもとゆふかつらぎ山に降る雪のまなく時なく思ほゆるかな

近江ぶり

○霜の――雪のともあり。

近江より朝立ちくればうねの野に鶴ぞ鳴くなる明けぬ此夜は

みづぐきぶり

水ぐきの岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも

とりものの歌

神垣のみむろの山の榊葉はかみのみまへにしげりあひにけり

霜やたびおけどかれせぬ榊葉のたちさかゆべき神のきねかも

みやまには霰ふるらし外山なるまさきのかづら色づきに

けり

わがかどの板井の清水里とほみ人し汲まねばみくさおひにけり

ひるめのうた

ささのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む

かへしものの歌

あをやきをかたいとによりて鶯のぬふてふかさは梅の花がさ

みののくに關の藤川たえずして君につかへむよろづ代までに

これは元慶のおほんべの美濃の歌

君が代はかぎりもあらじ長濱のまさごの數はよみつくすとも

これは仁和のおほんべの伊勢の國の歌

○うらこぐ――朝こぐともあり。
○つなで――ふなでともあり。

東歌

みちのくうた

あぶくまに霧たちわたり明けぬとも君をばやらじまてばすべなし

みちのくはいづくはあれど鹽竈のうらこぐ舟の綱手かなしも

をぐろ崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを

最上川のぼればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山なみもこえなむ

ひたち歌

筑波ねのこのもかのもにかげはあれど君がみ影にますかげはなし

筑波ねの嶺のもみぢ葉落ちつもりしるもしらぬもなべて悲しも

甲斐うた

かひがねをさやにも見しがけけれなく横ほりふせるさやの中山

甲斐が根をねこし山こし吹く風を人にもがもや言づてやらむ

墨滅歌

名物　　貫之

ひぐらし
柚人は宮木ひくらしあしびきの山のやまびこよびとよむなり

在二郭公下空蟬上一

いぬかみのとこの山なるなとり川いさとこたへよわがなもらすな

この歌ある人のあめのみかどのあふみのうねめにたまへると

かへし　　うねめの奉れる

やましなの音羽の瀧の音にだに人のしるべくわがこひめやも

衣通姫のひとりねて帝をこひ奉りて

わがせこがくべき宵なりささがにの蜘のふるまひかねてしるしも

古今和歌集
定價壹圓

昭和五年五月五日印刷
昭和五年五月十日發行

監修者　吉澤義則

發行者　東京市京橋區銀座四丁目一番地
立命館大學出版部
代表者　竹上孝太郎

印刷者　東京市京橋區二木町二番地
石丸祐正

印刷所　東京市京橋區鍛冶町二番地
東亞印刷株式會社

製本所　東京市牛込區神樂坂出町五ノ七番地
小暮製本所

發行所　立命館大學出版部
東京市京橋區銀座西二ノ一番地
電話京橋(五六)五六〇六番
振替口座　七五三六二番

鷹取岳陽先生著

再版

作詩入門

作詩參考書第一編

定價 金壹圓五拾錢
送料 拾二錢

本書の目次

第一章 序說……詩學の難易……楓橋夜泊の詩……寒山寺の詩碑……その詩の略解

第二章 月落烏啼霜滿天……七言絕句……七文字の位置……「フ」、「ツ」、「ク」「チ」、「キ」……平起と仄起……二四不同。二六對。……此の規則の效用（一）

（一）……此の規則の效用（二）

第三章 江村漁火對愁眠……中昊紀聞……單句構成法……謠曲『三井寺』……古今詩觀と唐詩選……前半と後半

第四章 姑蘇城外寒山寺……起承轉結……王阮亭の詩論……和歌の起承轉結……轉句の第七字目……承句と轉句との平仄關係……楓橋寺

第五章 夜半鐘聲到客船……後半詩の完成……韻脚……押韻……忘韻。詩之適也……夜半の鐘

第六章 平仄安排の要訣……紀曉嵐の平仄定式……腹無孤平……脚無三平……無韻之句腰字平……有韻之句腰字仄……除外例（一）……除外例（二）

第七章 作例……唐の杜牧と宋の韓駒……明の張煌の詩……王漁洋寒山夜雨の詩……琉球人の楓橋の詩……橋本海關の詩

附錄……單句構成諸式……兩句連成諸式……平仄識別便法……漢字四聲類別表

東京市京橋區西紺屋町九番地

立命館大學出版部

振替口座番號 東京七五三六二

中院富有先生著

新刊

文章入門

發行所 立命館大學出版部

東京市京橋區西紺屋町九番地
電話京橋五六〇番・振替東京七五三六二番

四六版金文字極美
定價 壹圓九拾錢
送料 拾八錢

必須の新知識

今日の文章は口語化されてゐるが、文字に現はれた文章には講演や談話とは非常に異つた獨特の効果を持つてをり、多くの文章的知見と洗練とを要する。是なくしては文章的光彩も力もあり得ない、本書は二百四十頁のうちに文章の進化、理論、技巧、論文の要領、能文の秘訣を述べ東西の文章と其の表現法を比較し文章生活への進出を説く等現代の文章術に必須の知解を與へてゐる、現代に處するものにとつて最新必須の知識であり、趣味ある習文の好指針である。

趣味の文章學

生田蝶介先生著

三版

作歌入門

生田蝶介作歌
參考叢書第一卷

定價 壹圓五拾錢
送料 拾八錢

著者は歌壇の隨一

日本人である限り、和歌は誰にも解り誰にも作れるものである。
本書は平明な言葉で、作歌の法を說き、歌の歷史を語り、和歌の精神を解明してゐる。

歌壇最近の秘傳書

東京市京橋區西紺屋町九番地
立命館大學出版部
振替口座番號 東京七五三六二

生田蝶介氏
松本仁氏 共著

生田蝶介 作歌
參考叢書第四編

三版

短歌文法七十講

四六版金文字美裝
定價 二圓二十錢
送料 十二錢

作歌自在の鍵

短歌の眞諦を悟るに緊要な修業はその正しき文法を會得することである。本書は短歌文法中最も須要なる助動詞、動詞(てにをは)接尾語、副詞のそれぞれについて明解なる講義を試みると共に、古今三千年に亘る作品を例歌として採錄すること實に二千首の多きに及んでゐる。これ初學の士も容易に短歌文法の妙諦に參入し、作歌の正道を歩み得べき古今獨歩の好著として江湖の正しき視野に一本をすゝめる所以である。

明解なる講義

東京市京橋區西紺屋町九
立命館大學出版部
振替口座番號 東京七五三六二

終